

## ◆研修会特集◆

## 図書室引っ越し顛末記

小林美香子

**抄録：**伊勢赤十字病院は、2011年末に約90年ぶりの新築移転を行った。本稿では、2006年に新築移転が決定してから新病院図書室開室までのプロセスおよび患者図書新設に向けての概要を報告する。図書室の引っ越しに関し重要な点は、①図書室に関する病院長の方針を早期に確認する、②図書室引っ越しの経験知を持つ人物の協力を得る、③図書委員会の協力を得る、の3点であった。

**Key Words：**図書室、引っ越し

## I. はじめに

当院は日本赤十字社初の支部病院として、1904年に宇治山田町古市（現伊勢市）に山田赤十字病院として開設され、1926年に度会郡御薮村（現伊勢市）に移転した。そしてこの度、旧病院から1 kmほど離れた伊勢市船江へ約90年ぶりの新築移転を行った。同時に病院名を山田赤十字病院から伊勢赤十字病院へと変更している。

病院概要を表1に示すが、図書室を管轄する研修センターは、2006年に附帯事業であった看護専門学校の閉校に伴い新設された部署である。この時病院管理棟にあった病院図書室は、旧看護専門学校の図書室へ引っ越しを行い、同時に管轄も事務部企画課から研修センターへと変更になった。現在、筆者と共に

働く図書係Aさんは、2006年の図書室の引っ越しを経験し、資料と共に研修センターへ異動してきた。そこでAさんの経験知を活かし進めた新病院図書室への引っ越しについて報告する。

表1 病院概要

(平成24年7月末までの実績)

病 床 数：655床(一般651床 感染症4床)
標 榜 科：29科
各種指定：地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院、臨床研修指定病院、地域災害拠点病院 など
1日平均患者数：外来953名、入院628名
病床利用率：95.9%
平均在院日数：11.8日(5, 6, 7月実績)
地域医療支援病院：紹介率 86.7%
逆紹介率 78.2%

KOBAYASHI Mikako

伊勢赤十字病院

m\_kobayashi@ise.jrc.or.jp

(受理日：2012. 8. 30)

## II. 図書室の現況

職員用の図書室は、医局、研修医室、看護部、専門・認定看護師室などのある5階職員

フロアに配置された。図書室の概要は表2のとおりである。

当院の建物は免震構造となっているが、什

表2 図書室概要

面 積：100.3m <sup>2</sup>
閱 覧 席：8席
パソコン：5台（1台は電子カルテ専用）
単 行 書：8,000冊
受入雑誌：和雑誌109タイトル
電子医学資料：洋雑誌38タイトル
図書担当者：研修課長（兼務）
図書係（専従）



図1 閲覧スペースと書架

器の配置は「東南海・南海地震に備え、安全な図書室を作る」ことを第一に考えた(図1)。書架の転倒防止対策として、①移動式書架(手動)を旧病院・図書室から移設した。②固定式書架については、移動式書架と金具で連結させた。③10本の雑誌棚すべてを金具で連結させ、一つの塊とした。

一方で、図書室内での想定される平時の事故としては、移動式書架の間に利用者がいる場合、他の利用者が人の存在に気付かず書架を移動させると挟まれる危険性がある。そのための事故防止対策としては、書架の間に入る際には書架にロックをかけるよう掲示物で注意喚起を行っている。

### Ⅲ. 新築移転決定から新図書室運用まで

#### 1. 図書委員会で進める新病院図書室作り

2006年に新築移転が決定してから、定期的で開催する図書委員会会議の議題として、「新病院図書室の開設に向けて」を取り上げた。また、新設病院の図書室見学などには、図書担当者だけでなく複数の図書委員が参加でき

表3 他施設の図書室見学実績

見学時期	見学先	参加者
2006年7月	A医科大学図書館・からだ情報館	図書担当者
2007年3月	B赤十字病院図書室	図書委員長（医師） 図書委員（診療放射線技師）
2007年3月	独立行政法人 国立病院機構 C医療センター 内 患者情報室	図書委員長（医師） 図書委員（医師） 図書担当者2名
2008年10月	D医科大学付属図書館 患者図書室	図書担当者2名
2008年12月	E赤十字病院図書室	図書担当者
2009年1月	F市立大学病院 患者情報ライブラリー	図書担当者 図書委員（看護師長）
2009年8月	G赤十字病院図書室	図書担当者2名
2010年7月	H医療センター図書室	図書担当者
2011年5月	I赤十字病院図書室	図書担当者

るように調整を行った。加えて、院外で開催される研修会にも図書委員の参加を勧め、研修会と同時に開催される図書室見学にも積極的に参加した（表3）。

これらは新病院図書室の構想を図書担当者だけで考えるのではなく、多職種の意見を反映した図書室を作りたかったからである。

## 2. 蔵書整理

旧図書室の面積は、閉架書庫として利用していた別室を合わせると222.6㎡であったが、新病院では半分以下の100.3㎡に減少した。当院では2007年から外国雑誌の電子ジャーナリズムを積極的に進め、2012年購入分からは電子ジャーナルに全面移行した。これにより外国雑誌については保管スペースが不要となった。図書室の面積が縮小されたことは時代の流れであるともいえるだろう。

当院は109年の歴史があるため、その間に収集した資料・雑誌・書籍が、他部署の引っ越し作業の途中で見つかり、届けられることもあった。

図書室ではこれまでも段階的に蔵書整理を行ってきたが、新図書室の面積が明らかになった時点で、さらに冊数の削減をはからなければならないという事実が明らかになった。論理的に考えれば、何らかの基準を設け、それに従い選別すればよいだけのことであった。しかし、新病院でのハード・ソフト面の運用に関する不確定要素が多かったこと、そして職員の同意を得るプロセスに時間を要し、その作業はゆっくりとしか進まなかった。

蔵書整理の作業の進捗に合わせ、確認事項や課題が次々に発生した。その都度、図書委員長（医師）と相談したり、図書委員会会議の議題にするなどし、引っ越しに向けた準備

をコツコツと進めた。具体的な課題として、①各部署に配架している書籍は原簿と一致しているのか、②引っ越しに伴うハード面の変化に伴い、各部署に配架している書籍を新たに図書室で保管することになるのか、③雑誌は電子ジャーナルでの閲覧が可能であれば廃棄してもよいか、④単行書は発行年が古いだけを理由に廃棄してもよいか、などがあった。

蔵書整理に関連して特記すべきことは、研修医・医学生の教育に熱心なある科の部長が、2011年9月開催の図書委員会会議に特別出席し、「外国雑誌のバックナンバーは廃棄せずに残して欲しい」と提案されたことであった。この一言により、bloodを除く外国雑誌のバックナンバーは、1990年から継続保管することになった。最終的に作成した廃棄基準は表4の通りであるが、それでも心情的に発行年では区切れない部分が残ったため、筆者が1冊ずつ現物を確認しながら峻別を行った。これに加え忘れてならないのは、日赤図書室協議会で進めている分担保管分であった。蔵書整理を行っている最中に日赤図書館雑誌Vol.18がタイミングよく手元に届き気付けたが、危うく分担分を廃棄してしまうところであった。

なお、これら蔵書整理に伴う廃棄書籍・雑誌については起案文書を作り、病院長決済により作業を進めた。

## 3. 患者図書室新設に向けて

旧病院では患者図書室が開設されていなかった。そのため、「新病院で新設する患者図書室は職員用図書室と共用するのか、あるいは独立させるのか」について検討する必要があった。そこで、新病院建築の話が出て間もなくの2008年4月、図書委員会会議に病院長

表4 廃棄対象書籍の基準

種別No.	種 別	廃 棄 基 準
1	大系・MOOK（小児科・外科・内科）	1999年以前の発行分を廃棄する
2	医学のあゆみ、日本臨床	2007年以前の発行分を廃棄する（5年間分を残す）
3	医事新報	2010年以前の発行分を廃棄する（1年間分を残す）
4	発行年の古い書籍（単行書）	1999年以前の発行分を廃棄し、2000年分から残すただし、普遍的な内容のものは残す
5	洋雑誌製本	1990年以後発行分を全て残す。保管スペースが確保できず、廃棄が必要であれば再検討する
6	和雑誌製本	1999年以前の発行分を廃棄し、2000年分から残す。ただし、メディカルオンラインに掲載されている雑誌については、3年間分だけを残す
7	叢書	1999年以前の発行分を廃棄する

の出席を依頼した。この席で病院長から「職員がオン・オフを実感できるように、患者動線と職員動線を可能な限り区分した建物構造とするので、患者用と職員用の図書室は別々に設置する」との方針が明確に出された。

その3年後の2010年7月から、筆者が入退院総合患者支援センター設立部会（後に、患者支援センターと名称が決定）に患者図書担当として参加することになった。2006年度に研修センターへ図書室業務が移行した当初から練り進めてきた患者図書の構想を、この会議の参加者と共有することをねらいに発言をした。



図2 患者支援センター 図書コーナー

新設となる患者図書コーナーをどの部署が担当するかについては、新病院開院の数月前まで保留となっていたが、患者支援センター内に“図書コーナー”という名称で開設されることに伴い、医療社会事業部が担当し、研修センター図書室が運営をサポートすることに決定した。図書コーナーは2012年1月4日の外来診療開始と同時にスタートした（図2）。本稿では、紙面の都合により詳細は割愛する。

#### 4. 引っ越しに向けた作業スケジュール

（表5）

引っ越しの準備は、引っ越しの9か月前に病院建設課を通じ、設計士に対して詳細な要望を提出してから具体化し始めた。この時に提示した要望書の内容については、他施設見学で得た情報や文献を参考に作成した。設計士と話し合うまでは、引っ越しに向け何をすべきかがぼんやりとしか分からなかったが、これ以後、引っ越しに向けた段取りがイメージでき、蔵書調整に取り掛かり始めることができた。要望書の内容で反省点を挙げると、

表5 引っ越しに向けた作業スケジュール

時 期		引 っ 越 し までの期間	作 業 内 容
2011年	3 月	－ 9 か月	設計士に図書室からの要望を提出 廃棄対象書籍の一部処分 診療科 廃棄対象書籍の回収文書配布、回収
	7 月	－ 5 ヶ月	事務部門 廃棄対象書籍の回収文書配布、回収
	8 月	－ 4 ヶ月	廃棄対象書籍回収締切
	9 月	－ 3 ヶ月	書籍廃棄処分開始（除籍作業）
	10月 10月28日	－ 2 ヶ月	廃棄書籍の一時保管 引っ越し担当者と初回の打ち合わせ
	11月14日～	－ 1 ヶ月	廃棄書籍の箱詰め 継続保管分（引っ越し対象）の荷作り開始 書籍貸出停止
	11月28日		旧病院図書室完全閉室
	12月 3 日	0 日（1 日目）	1 回目・図書室引っ越し（荷運び）
	12月 4 日～		新病院・1 回目引っ越し分 荷ほどこ 旧病院・2 回目引っ越し分 荷作り
	12月11日	0 日（2 日目）	2 回目・図書室引っ越し（荷運び）
	12月12日～		新病院・2 回目引っ越し分 荷ほどこ 新図書室開室準備
	12月26日～		入院患者引っ越し 新図書室開室
2012年	1 月 4 日		新病院開院、患者図書コーナーオープン

電源や LAN ケーブル、電話線の差し込み口の設置位置を決めていなかったことである。後に追加工事が必要となったので、予め細かいところまで詰めておく必要があると感じた。

病院の引っ越しは、コンサルティング会社の協力により進められた。引っ越しの2か月前に、引っ越し担当であるBさんと初回の打ち合わせを行った。その際、「患者さんの引っ越し日である12月26日には、通常の図書室業務ができるように進めましょう」と明確な目標提示がされ、他部署よりも早期に引っ越し準備を開始した。

引っ越しに関する病院の方針は、荷運びは

引っ越し業者が行うが、荷作り荷ほどきは職員が行うということだった。6年前の同敷地内での図書室の引っ越しの際には、運送業者に依頼し職員が関与していなかったため、この方針には驚いた。担当部署に交渉を試みたが図書室だけが例外ではないとの理由で、研修センター長を含めた女性職員6名で図書室内にあった書籍・雑誌等の資料すべてを段ボール箱に詰めた。その量は、段ボール箱(33cm×38cm×45cm) 1,200箱分にもなった。

1,200箱のうち400箱分は廃棄書籍であり旧病院にて処分するが、残りの800箱分を新病院へ荷運びする必要があった。しかし、新病院での荷ほどこ作業のスペースを考慮すると、



図3 1日目(12月3日)の荷運び後



図4 荷ほどき作業



図5 2日目(12月11日)の荷運び後



図6 廃棄書籍(旧病院)

一度に800箱を運ぶことはできないため、2日間に分けて荷運びをする段取りになった。1日目の荷運びの翌日からは、新病院で荷ほどきをするグループ、旧病院で2日目の荷運びに向けて荷づくりをするグループに分かれ作業を行った。全部の段ボールの荷ほどきを終えたのは、2日目の荷運びの5日後であった(図3～図6)。

6年前の同敷地内での図書室の引っ越しの際には、運送業者が配架作業を行ったが、製本雑誌の並び順がくずれており、事後処理に相当の時間を費やしたという苦いエピソードがあった。このことから考えると、体力的には厳しかったが、職員が配架作業を行ったこ

とは、二度手間にならず効率的であったと考えることができる。

#### Ⅳ. 図書室の引っ越し物語

私事であるが、引っ越し6ヶ月前の2012年7月に良性疾患で開腹術を受けた。1ヶ月後の8月には職場復帰をしていたが、引っ越し作業が具体化した11月中旬になっても階段昇降すらやっとという体力の回復状況であった。

以下は、私の個人ブログからの抜粋である。術後の回復過程で体験した図書室の引っ越しにまつわる出来事を引っ越し物語として紹介したいと思う。

11月21日。2か月ぶりくらいにタクシーで帰宅した。その理由は、1日を通して図書室の引っ越し準備をしていたせいである。なるべく腹筋に力がかからないようにしていたせいか、足と腕が重く、歩いて帰るのを断念した。帰宅後、1時間くらいゆっくり休んだら復活した。だんだん体力が回復してきているのを実感するが、一人前に働くのにはもう少し時間がかかりそうである。職場の引っ越し準備がリハビリだと思って、体力づくりをしようと思う。

12月8日。引っ越し作業に入り、早3週間である。まるで農繁期のように、日に追われて作業を進めている。短期間に一気に物事を成し遂げる、100年に一度の職場の引っ越しはそんな感じ。体がだるい。朝、目覚めると、手のこわばり感が……。まあ、これだけのことができるようになった体力を認めなければ。

12月14日。病院図書室の荷造り、荷ほどき業務に入り4週目に入った。本日は、製本雑誌を棚に収める作業を半日ほど担当した。ついに筋肉痛ではなく、手首の関節まで痛くなってきた。これは私だけではなく、わが部署のスタッフ全員の症状だ。夜中には、手が痛くて目が覚めるし……。100年に一度のこととは思いますが、“段ボール箱から本を棚に収める”こんなことを看護師がしていてよいのだろうか？と思いながらも、私の手を本が通過する瞬間にアイデアがいっぱい湧いてくる。病院図書室の可能性は開けている!!

12月16日。新病院図書室の引っ越し作業に一区切り。何とか段ボール800箱分の書籍が、本棚に収まった。我が職場スタッフと引っ越し業者が総力を挙げ臨んだ結果だ。昨日、引っ越し業者さん（私は彼のことを“物品仲人さ

ん”と名付けた）に、「夜なべ仕事で、雑誌棚の移動をお願いします」と依頼した。“物品仲人さん”はいつも夜9時頃に新病院図書室へ足を運び、業務進捗状況のチェックをしていた。今朝の出勤時、入館簿を見ると昨夜は0時前に入館し、1時前に退館していた記録が。こんなに遅い時間から作業をしていただくことになるとは……。でも、これをしてもらわないと私が翌日の作業に入れない。「大変な仕事だなあ」と思いながら、QC活動の「後工程はお客様」という言葉が頭に浮かんだ。

本日の午前中いっぱいをかけ、雑誌を棚に収め終わったとき、棚を固定する職人さんが大阪からやってきた。この作業を専門にする人がいることに驚いた！図書室づくりの基本方針は、地震が来ても被害を最小限にできる図書室什器の配置である。固定書架と移動式書架を固定器具で連結、雑誌棚10本も全てねじで連結させ、一つの塊にしてもらった。職人さんは作業が終了すると持参した携帯クリーナーで、作業中に出た削りくずをきれいにして吸い取っていた。この様子を見て、自己完結型の仕事をしてこそ職人さんなのだと思った。次はパソコン関連の引っ越しと、電子ジャーナルのIPアドレスの切り替えがうまくいくかが課題だ。最初から完璧な業務計画は存在しない。作業を進めながら皆で方法を考え、よりベストの方法を探す。あれやこれやと気を揉んでも仕方ないので、「きつとうまくいく」と思うようにしたらうまくいった（と思う）。まだまだ引っ越し業務は残っているが、これで一息つけた。

12月23日。昨日から、タクシー通勤を再開してしまった。というのは、朝食をトレーに載せ、こたつの上に置こうとした瞬間、「あ、

腰が！」これは、いわゆるぎっくり腰？職場の引っ越し作業は、一昨日にちょうど研修医室の本を段ボール箱に収め、自分のデスク周りも整理してあったので、ほぼ終了できていた。このタイミングでこんな体になるとは。

12月24日。「ゴミか宝か」「過去との決別」「〇〇コレクション」。病院図書室の引っ越しに携わった私の思い出はこの言葉で表現できると思う。旧病院から新病院への引っ越しに伴い、図書室の面積は狭くなった（感覚的には、60%くらいに縮小）。これに伴い、蔵書整理をする必要が生じた。整理とはかっこいいが、要するに処分品かどうかを選別するということだ。疾患や治療については、どんどん新しくなっていくので、年数を区切って処分。これは簡単だった。問題は、普遍的な考えを書いたもの、個人および組織の業績が記されたものだった。ひょっとしたら古くなればなるほど価値のあるものなのかも知れない。「昔の人の方がよっぽどいいことを言っている」と思うものがいっぱいあった。私たちは、もっと歴史から学ばなければならないのだと思う。可能ならば全部残したいが、スペースの関係上、断腸の思いで「過去との決別」の決断を1冊ずつ行った。さて、一昨日は事務系の図書委員さんからお声がかかった。「ある部署が書棚整理をして、全部捨てると言ってるけど、一度、図書担当者が見た方がよいのでは？」。まるで出張買い取り人のようだ。そこで、まずは私一人が1時間をかけて選別し、段ボール1箱分持ち帰ってきた。これを図書係Aさんに見せると、何か匂いを感じとったのか、「あの～、私もそこへ見に行きましようか」と。1時間後、彼女はさらに段ボール1箱分を持って帰ってきた。「棄てるんだったら、その前に見せてください」ある人にとっ

てはゴミでも、ある人にとっては宝物になる。できる図書担当者は、ゴミから宝を発掘するのだ。それにしても、ある一人の人の気づきで救われた段ボール2箱分の本。電子ジャーナル化が進み、図書室の存在意義が問われる現在において、貴重な出来事だったと思う。私の勤務する病院は歴史が長い。今回の引っ越しにより、明治、大正と記してある現物が出てくる。物と人、歴史をつなげる人になりたいと思うこの頃である。

12月26日。本日は、旧病院から新病院へ患者さんの引っ越し。図書室は目標どおり無事に開室した。利用者はゼロ。

12月28日。本日は仕事納めの日であった。こころ穏やかに仕事を終え、早めに仕事を切り上げられるかと思ったが面倒なことが発生した。図書係Aさんの業務用PCが壊れた。平時でもPCにまつわることはややこしいのに、よりによってこんな時に……。さて、それでも新しい建物での暮らしは楽しい。

## V. 結論

図書室の引っ越しに関し重要な点は下記の3点であった。

1. 図書室に関する病院長の方針を早期に確認する。
2. 図書室引っ越しの経験知を持つ人物の協力を得る。
3. 図書委員会の協力を得る。

## VI. おわりに

新病院への引っ越しから8か月が経過し、ようやく図書室内が整理できた。つい2ヶ月前までは、旧病院から持ってはきたが、棚に収まりきれなかった段ボール箱が積まれていた。引っ越し後の環境整備には想像していた



よりも時間がかかった。

今回の図書室の引っ越しで分かったことは、段ボール箱が引っ越しの重要アイテムであったということである。図書係Aさんは、6年前の図書室の引っ越し経験に基づき、引っ越し前年の夏の暑い時からせつせと点滴の入っていた廃棄用段ボール箱を回収、ストックしていた。そのお陰で、引っ越し業者が段ボール箱を持ち込む前から引っ越しに向けた荷づくり作業を進めることができた。また、引っ越し担当Bさんは、他部署より一足早く荷ほどきを終えた図書室分の中古段ボールを他部署へ融通し、資源の有効活用を行っていた。

今回の図書室の引っ越しは、図書係Aさん、引っ越し担当Bさんの経験知によるところが大きい。加えて、図書委員会委員、研修センター職員を始めとする全職員の協力により、

大きなトラブルもなく無事に図書室の引っ越しを終えることができた。最後になるが、快く図書室見学に応じて下さった他施設の図書担当者の方々を始めとするお世話になった全ての方々にお礼を申し上げたい。

今後は、90年ぶりの新築移転に伴う引っ越し業務に携われたことに感謝し、職員の知をサポートすることを目標に、IT時代に求められる図書室機能の充実、発展に寄与していきたいと考える。

#### 参考文献

- 1) 入田和恵：まさかの被災体験。日赤図書館雑誌 2011；18(1)：31-34.
- 2) 病院図書室研究会デスクマニュアル編集委員会編：病院図書室デスクマニュアル 2001. pp.17-23.